日本中で行なわれるということなのだ。

学校現場で、今回の判決を足がかりにしていかに闘うか、今争われている関連裁判でどう勝っていくかとともに、生徒や保護者を含めた一般市民にどのようにアピールし、連帯して闘うことができるのかが問われている。

なんとしてもここは踏んばり所だろう。

（さはし・きょうしろう「予防訴訟」原告、「日の丸」「君が代」被処分者）

杉並区における「つくる会」教科書採択の攻防

奥山たえこ

東京都杉並区と言えば原水禁運動発祥の地であり、市民運動も盛んなまちである。その杉並で、「新しい歴史教科書をつくる会」（以下「つくる会」）の教科書が採択された衝撃は大きい。実は杉並で起こったことは、首長がその気になりさえすれば、どこでも可能なことばかりなのである。安倍晋三政権の下で、教育基本法が風前の灯となっているいま、対岸の火事でなく、他山の石としていただければと思う。

■スタートは教育委員の入れ替え

どの教科書を使うかを最終的に決めるのは教育委員たちである（法的根拠なしとの論もある）。その人選権は首長にあるから、教育委員会は形式的には独立しているものの、首長の意向を色濃く反映することが可能な仕組みである。

杉並区長山田宏氏は二〇〇〇年、この五名の教育委員のうち三名を入れ替えようとした。事前に露見し反対運動に阻まれて一名を取下げたものの、二名の交代に成功した（議会では公明党が退席したけれども可決された）。翌年の採択では、この二名が「つくる会」教科書を推したが、採択には至らなかった。区長は二〇〇三年、さらに一名教育長を入れ替えることで過半数を握った。これで区長にとっての採択環境は整ったことになる。

■周到な環境整備

実は、準備はこれだけではなかった。教育委員会事務局は着々と採択態勢へとシフトしていたのである。それまでは現場の教員が数冊に絞り込んで学校票を投じており、教育委員会はその中から決定していた。ところがその制度を廃止して、すべての教科書を対象に調査せよという態勢に変えた。つまり従来なら足切りになっていた「つくる会」教科書が、最終採択の場まで生き残ることになったのである。

それでもあきたらず、採択手続きを定めた要綱や手引きを作り変えた。現場教員の調査結果（調査報告書）のとりまとめを行なう審議会を、単なる調査委員会に格下げし、「教員の意見を聞き」の文言は消し去られてしまった。手引きには「ただし、調査にあたっては、中学校学習指導要領平成十年告示の趣旨を踏まえるものとする」と明記された。この告示には「国を愛する」が学習指導要領に盛り込まれていたのである。何のことはない、杉並区教育委員会は、教育基本法改悪の露払いを行なっていたというわけである。

■市民の攻防／内外の応援

もちろん杉並のことだから、市民の反対運動は大きかった。「つくる会」教科書デビューの二〇〇一年には、「採択しないで！」の声を力いっぱい届けて、五〇〇人を超える人間の鎖で区役所を囲んだ。市民団体「杉並の教育を考えるみんなの会」（みんなの会）と、「『つくる会』

させられている。

■書き換え問題の発覚とNHK報道

実は採択の一〇日ほど前に、現場教員が書いた「調査報告書」が教育委員会によって書き換えを命じられていた事件が発覚した。これは日教組系組合の記者会見で露見し、新聞で大きく報道された。対象教員は意に反して、翌年度、他区に組合の書記長ともども異動させられた。書き換えた中には、評価が正反対にされたものもあったのである。こうまでして採択の体裁を整えたかったというわけか。

NHKは十月二十日の「クローズアップ現代」で、現場教員の報告内容と採択結果を検証した番組を報道したが、「つくる会」教科書については現場教員の評価は最低だった、それでも杉並区は採択した事実を、グラフで如実に示してくれた。

■現在の状況

その後杉並では有志が愛媛、栃木と連携して裁判闘争に入り、現在は住民訴訟も提訴している。

次の採択は三年後である。山田区長が再選されれば、再び採択の公算が大きい。しかも公正取引委員会は教科書の特殊指定を外した（新聞に関しては阻止出来たが）ため、営業攻勢も激しくなると予想される。「つくる会」から分裂した八木秀次氏は安倍政権のブレーンとして活躍中であり、権限を握る文部科学省の動向も気が抜けない。私たちの闘いは終わらない。

（おくやま・たえこ　杉並区議会議員）

の教科書採択に反対する杉並親の会」（親の会）は、この頃に出来ている。

二〇〇五年には両会は、それぞれが連日のように区役所前や区内駅頭でチラシを配り、区民に協力を呼びかけた。みんなの会は韓国の「日本の教科書を正す運動本部」と知り合い、人的交流が始まった。幾度となく訪韓・来日し、採択後も運動方針の交換や総括を行なっている。五月には、杉並区の友好都市である韓国ソウル市瑞草（ソチョ）区の区長や国会議員を招いてシンポジウムを成功させた。このとき山田区長は、瑞草区長の来日に横やりを入れている。瑞草区からは区議会議員全員の署名が添えられた不採択を望む決議書も届いている。

二〇〇五年には、「（採択されそうで）危ない」とされる地域の教育委員会には、全国からFAXやメールが集中し、その採択結果情報が毎日のようにネットを駆け巡った。

■二〇〇五年八月：継続のはてに採択

八月四日にはマスコミ各社も集まり、「親の会」は人間の鎖で区役所を囲み、それに反対する一名が逮捕される騒ぎもあった。五〇〇名ほどが傍聴券二〇枚を求めて集まり、抽選にあぶれた人たちは別室で音声中継を聞いた。

まず二名が「つくる会」教科書を推した後、賛否が注目されていた納冨善朗教育長（当時）は、三社の特徴を挙げるものの決めきれない。しまいには「（三社のうち）どれでもよい」と保留した。これが「（もう）どうでもよい」と聞こえたため、会場が一瞬どよめいた。いくつか出版社名が挙げられるものの、委員長は決めようとしない。この時、（輪読する教科書の）コピーを手元において読み込んだと四〇分間発言して「つくる会」教科書を推した大藏雄之助委員がもう一度読み返したいと継続の動議を提出し、「慎重に審議しよう」との声もあって、社会科は、異例の継続審査となった。これは織り込み済みであったと推測される。というのは、通常は地理から始める審議を歴史から始めたこと。また、この数日後、杉並の子どもたちが瑞草区にホームステイに出かけることになっており、その前に決めるのは避けようとの力が働いたと言われているからである。

ところでこの審議の中で安本ゆみ委員は「（『つくる会』教科書は）戦争に向かう教科書だと思う」と発言した。これを捉えて「つくる会」は、訴訟も辞さないと公開質問状を送っている。

私たち反対する市民たちは、この後いっそう街宣運動に力を入れた。注目すべきは、「つくる会」側と目される団体も街頭に立ったことである。それまで彼らは「静謐な環境」を旗印に、じっと雌伏していたが、たぶん矢も盾もたまらなくなったのだろう。ちなみに「つくる会」ではこういった運動方針に関して路線対立があり、宮崎正治事務局長の解任劇に発展している。内紛抗争については、西尾幹二氏や藤岡信勝氏のブログにも詳しい。また八月十一日には、靖国神社を崇拝する「日本会議」と人脈の重なるスカパーTV「チャンネル桜」と市民との間で、駅前で小競り合いもあった。

継続された十二日には千人ほどが集まり、再び大委員会室内で音声中継を聞くことになる。この日は「つくる会」副会長藤岡信勝氏が傍聴席に陣取る中、結局キーマンの納冨氏は、「つくる会」教科書だけが「戦争はなくならない」と現実を書いているなどを理由にして一位に推し、決定となった。藤岡氏はその直後、公民科目の審議を見ることなく退席、区役所前敷地にて勝利宣言を行なった。インターネットの中の匿名掲示板で、誹謗中傷の行きかう「2ちゃんねる」に集う若者たちもお祝いにかけつけ、敷地内は騒然となった。

採択後、委員長は、採択の「責任と苦悩」を吐露し、副読本の使用を認めたいとの、これまた異例の文章を発表したものの、「つくる会」の抗議によって、個人的な意見に過ぎなかったと事実上撤回